

中世日本文藝に現れたる佛教思想

石 原 清 志

中世を通じて概観すれば、平安朝の華やかな公家の文化は、時代の経過と共に享樂的頹廢的傾向を増して、遂に政治の紛亂を来し、武家勢力と文藝を余儀なくされるに至つた時代相を反映して、文藝の世界に於いても、王朝時代の繊細な統一ある作品から素朴、雄健な作品が生じて来た。これは王朝時代の和文（假名文）から和漢混清文に變化した爲でもあるが、同時に鋭敏なる感性と優美なる情趣の世界に浸りきつて、強い意欲と人生に対する内面的統一も得なかつた立場から平安末期の動亂に依る榮枯盛衰に直面して得た中世人の強い人生に対する無常觀的思想の発露であらう。

そして中世前期に当る鎌倉時代に於いては、仏教觀によつて人生を厭離しようとする心持が意識的に、又意識的に行われた結果、自己の内面にあつて闘争する二探の心情の動きを見るこゝが出来るのである。即ち、現実の自己を脱却して、永遠の世界に統一しようとする心持と、現実の自己を生き通し度いという心持とである。現実を脱離したいという心情の故から、現実生活に対する執着が現れて来るのである。それは中世を代表する知識人、西行、長明に於いて

と同様である。

然し、中世も後期と呼ばれる室町時代に入ると全般的に、人間としての強い執着から脱却して、無我なる普遍的境地に入り得たように思われる。中世後期は差別の相から普遍的の相に帰した時代であるといえよう。このように中世は前後の時代に特長を有するが、中世全体を貫く思潮は、仏教思想であり、教権を導ぶ伝統的神祕思想であつた。そしてこの時代に興起した仏教諸宗派の思想を強く反映したものは、文藝であつた。中世の文芸には幽暗の色調が濃く、王朝文芸に対して対蹠的であると云われている。その文芸は近世へと展開する過程の特性として、矢張り仏教的思想の影響を顯著に受けてゐると云えるであらう。その一として無常観の展開を、鎌倉期に於ける末法思想より、慈円僧正の名著、「愚管抄」及び中世、否日本文芸全般を通じての各作、「平家物語」を概観することに依つて、探求してみたいと思う。

末法思想

目まぐるしい転変の時代であつた中世は、思想的にも多様な変遷を示している。神、儒、仏、道の思想が入り乱れてゐるが、それを統一するものは仏教的無常観であらう。かゝる思想の裏付けとして末法到来の思想があつた。それは平安末期から元寇前後まで、当時の人心に強い影響を与えていた。伝教大師作と云われる「末法燈明記」に依れば、仏滅后五百年を正法、その後一千年を像法、次に末法に入り、その始めの五百年を「道塔堅固」の時であるとし、後の五百年を仏法破滅すべき「阿耨堅固」の時代としている。そして同書には延暦二十年が仏滅后一千四百十年として、之は像法の時であるが世の乱れは、末法に異ならないとしている。「正像

末文」。「神明鑑」等の異説はあるが、一説には平安末期に末法に入ると信ぜられたようである。又、当時の時代相はこれを信じた。その第一の現実には僧侶の頽廢であつた。三台清行の意見封事には、諸寺の年分及び嵯峨時の度者は、年南二三吾人に及び、その半以上は邪惡の徒であるとして、諸國の百姓課役を述れるために落髮する者多く、遂には天下人民の三分の二は禿者ならんとしてゐると記してゐる。又、諸國の群盜は所謂「惡僧」となり、諸大寺を背景に都に出ては喧誶を繰り返し、諸寺相互は、斗争を争とした。白河上皇も御心に任せぬ者は熊六のさい、鴨川の水、山法師ばかりなりと慨歎せられ、山門、寺門の僧兵の暴狀は、「扶桑略記」「中右記」「玉葉」等に詳しい。保元以来の戦亂と、天変、地異の饑饉は、月野山の隱者、鴨長明をして、「世の人みな病み死にけりけり、日をへつゝ、さねまりゆくさま、少水の奥のたとへにかゝりへり」(「方丈記」)と云わしめ、古寺に佛を盗み、堂塔の物の具を破り取るものを見て、「濁惡の世にしも生れあひて、かゝる心うさわざをなん見たりし」と歎かすには居られぬ状態を現出せしめた。然しこの現実の中から、宋祖法然上人を始め、親慈、日蓮、道元、栄西等の偉人が立つて新しい宗派を確立して、末世に渴仰された宋教を大成して行つた。その頃まで生きた歸けた末法思想は、新宋派の隆盛に伴つて、漸次その影響力を失つて行つたのである。

「愚管抄」

世の中古無常と觀じ、末法劫末を嘆く宗教的信仰が中世人の豊かな教養に依つて理論となり、丁史哲學の書として現れたのが、「愚管抄」である。愚管抄の著者慈円は、四度天台座主となつた高僧であり、一面歌集「拾玉集」の歌人でもあり、名門九條兼実の弟である。「愚管抄

しは、神武帝より承久の變までの丁史を敘述したものであり、仏教の信仰に基く、「道理」の史観によつて讀かれたものである。現世を末世と観ずる思想は、神武以来の丁史を具に觀察した若者自身の結論であつた。その丁史の根底に存する理念が、「道理」である。慈円に依れば、仏法、王法相助ける道理は現實の政治上に於いて實現されるとしている。國初より成務帝までを正法と見て、「冥顯和合シテ道理ヲ道理ニテトウスメウハ初メナリ、是ハ神武ヨリ十三代マテ敷」と言つてゐるのはその意味である。そして神武以後承久までを七時代に区分してゐる。道理の顯現するさまを、「ユノヤウヲ日本國ノ世ノハジメヨリ、次第ニ王臣の器量果報表へ行クニシタガヒテ、カ、ル道理ヲ作りカヘシノシテ世ノ中ハスグルナリ。劫初劫末ノ道理ニ、仏法王法、上古中古、王臣万民ノ器量ヲカクヒシト作りアハス也」と述べてゐる。こゝでは道理は因果の法則であり、この自然の道理の上に實踐規範としての道理（道）を實現せんとする王臣万民の才能があり、そこに展開する丁史争奪↓自然と人為とを超えて、「一切ノ法ハタゞ道理」なる高次必然法則が丁史を支配して時代は経過して行くとするのである。この慈円の「道理」の史観は、仏教に云う法爾自然の事であり、三時の説に依り日本史の過程を觀ずること、「ウツリ行ク世」と「作りカフル世」との相剋、自然と人為との合一を仏教的に法爾自然の理によつて眺める事、これが「愚庵抄」の史観であり慈円の仏教家としての立場を示すものであつた。それ故、仏教思想の結実した文芸としてこの書の価値も存するのである。

「平家物語」

「平家物語」は變転する中心が生んだ文化遺産、又は單なる丁史的所産といふのみならず、

全日本文芸を通じて、有数の作品である。平安朝末期の騷亂と榮枯盛衰の相とが生んだ人生に對する無常観は、仏教の流布と相俟つて、中世に現れた多くの文芸に著しく滲透している。「愚管抄」が時代の最も高い教養の所産とするならば、「平家物語」はよく広汎な階層が耳を傾けた國民的文芸と云えるであらう。平家物語の成立については定説がない。徒然草に芭田の扶持を受けた信濃前司行長が、此の物語を作り、生仏という當目の法師に語せたところか、信憑するに足りない。唯々「語り物」として時代の経過と共に多くの改変を見た事は疑を入れない所であらう。此の物語に於いて最も重要な事は、淨土教の思想に立つて平家二十年の興亡を敘し、人生に對する無常観で貫いてゐる事である。冒頭の石文、「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顯す、蒼れものミスしからず、唯吾の夢の如し、猛き人も遂には滅びぬ、偏に眞の箇の處に同じしは、人の世の無常を説いて、美しき哀感とぞある。榮達の道を上りつめた平家一門は、榮華の絶頂から没落の一途を辿り、一門の棟梁一世の順者重盛は自ら願つて死を早め、種勢を悉にした強烈な執慾の人清も、伊豆の流人の幻影に負えつゝ、奇病に身を脱かれて逝く。旭將軍とその名をうたわれた木曾義仲も、平家一門を都より追い落しはしたか、昨日の勝者は今日の敗者とまり、衆軍が乘に非難を嚴峻を遂ける。平家は源氏の勢に敵す可くもなく、一門唐浦に悉く滅亡する段に於いて、二位尼幼帝を抱いて入水するに及んで、

「悲しき哉、無常の春の風、忽に羣の御容を散し、無情哉、分段の荒き浪、玉体を流れ奉る」として無常悲痛の感慨はこゝに極まる。こゝには無常流転の相が如実感として把握されている

。そしてこの無常觀は諦念とし考えるならば、平家物語全篇を流れる韻律美、対偶美等の内側に思辨的要素が背骨をなしている事が知られるであらう。最後の達原巻に於ける建礼門院と後白河法皇との対話より知らぬ、如く、厭離穢土、欣求淨土として西方極樂に往生せんとする淨土思想が、この平家物語を統一していると考えられるのである。これが平曲としてあらゆる階層に及んで行つた時、感傷的、音楽的哀感の故に、淨土教的思想が原作当時よりも、幾分その意義を失われめられたかも知れぬ。然し文芸上の明證に於いて考える時、それで良かったのである。何故なら、現在もまだ勝れた作品として生命を持ち続けているから。

「結」伏し

既に与えられたスペースを越過した。平家物語、否、中世文芸の周辺に多くの問題を残している事を遺憾に思うが、これは将来の課題として、こゝを以て一応の結末としたい。